飛翔な日々　～編集委員が、「記者」としての立場を忘れ、自由につづるコーナー～

「笑顔」

21生　平野　詩歩

毎日が楽しいなんて　毎日楽しくないのと同じなんて
そんなことないんだって　証明する毎日

いつかの花火　君の瞳に映るのは
一瞬のキラメキといつまでも咲き誇る笑顔

あの日の電車の窓に　映る君の横顔を
ガラス越しに見る　笑顔眩しくて

響き合う　うるさいくらいの笑い声
いつまでも続きますように

未来は当然見えなくて　落ち込む時には
何故か悲しいことばかり　思い出しては凹む悪循環
そんな時瞼閉じて深呼吸　笑顔の方程式

今日が過去に変わり　写真が色あせ朽ちても
心に鮮やかな笑顔　消えない自信がある

日ごとに増していく　一瞬一瞬の重さ
僕らの笑顔の分だけ　輝き続けるだろう

こんな僕らだから　きっとこれからも
毎日を楽しくいられるよ　辛いことも笑い飛ばせるよ

「大人の視点　子供の視点」

20生　吉田　聡

小さい頃から遠くに行くのが好きだった。小学生の頃は親に黙ってよく自転車で遠くに出掛けていた。遠くにといっても当時の自分にとってで、せいぜい自分の住んでいる町か、その隣までである。それでも当時の自分にとっては大冒険でわくわくするものだった。

そんな性格だったせいか、今ではサイクリング部に入って日本中を旅している。同じ日本といえども様々で、四国山地は急峻で、高知でみた太平洋は穏やかな瀬戸内海と違いダイナミックで、高野山は修行僧の方がいたりしてまさに「聖地」だった。スケールは変わったけれど、今も変わらず「大冒険」をしている。

今と昔でもう一つ変わったと思うのが視線の高さだ。そのことを感じたのが、小学校の時の通学路を帰省した際に歩いてみた時だ。同じ道なのに視線の高さが違うと違う風景に見えるし、見えるようになったものの、見えなくなったものがあると気付いた。塀の向こう側は見えるようになったけれど、地面にあるものは見えにくくなった。そういえば昔は、草やテントウムシや石ころまでが面白かった。昔はあんなに狭い行動範囲で満足していたのはそのためだと思う。

きっと、今の日常生活でも見逃しているものがいっぱいあると思う。だからたまにはしゃがんでみて、子供の頃の視点で見ることを忘れないようにしたい。

「ペンネームの中の人」

19生　中村　洋平

突然ですが、皆さんはペンネームって持っていますか？　私は持っています。最近ではＳＮＳが流行ったり、ネット上のいろんなところで会員登録をすることってありますよね。そうでなくても、オリキャンでニックネームを先輩から頂戴したりします。

しかし、皆さんにとって、ペンネームやハンドルネームとはなにか、なんて考えたことがありますか？　自分を守るもの、でしょうか？

私は高校の頃、文学部に所属していて、文学部というのは所謂文芸部のことで、小説を書いていました。その時は本名を使っていました。それが当たり前だと思っていましたし、その頃の自分にとって、小説を書くことは、自己主張だったような気がします。本名を使わないのは、逃げることだと思っていました。評価から逃げること。自分から逃げること。

高校1年の終わり頃、ちょうど、文系・理系の選択の時期でした。その頃私は、わりと本気でモノ書きとして生きて行きたいなと思っていました。しかし、その一方でそれが狭く険しい道であることも知っていました。だから、物理がわりと好きだったこともあって、理系に進みました。

ここで、何かが変わってしまったのかもしれません。自分の中に、文系に進んだもう一人の自分がいるような気がしてならないのです。今でも、物語を書くのは好きです。ネットを利用して公開することが多いので、その時よくペンネームを使います。

ペンネームって、自分で決められますよね。本名と違って、好きな名前をいつだって付けられますし、改名するのも自由です。だから、私にはなんだかペンネームって、生簀（いけす）のような気がします。自分の中の自分をその中で泳がせて、うまく欲求不満を解消してやるのです。代わりに外には出さない。まるで、ペンネームという一個のキャラクターを作り上げているような気さえするのです。

大学に入ってから演劇をするようになって、役者として舞台に立つときは、公演のパンフレットに本名が載ります。お芝居の中では別の人ですが、その人を演じているのは私です。私にとっての言い間違いが、その人にとっては真実になります。これって、どこか似ているような気がします。

ペンネームを使うとき、私はどこかで逃げているのかもしれません。自分の言葉には責任を持っているべきなのだと思います。ブログや掲示板に書き込むとき、匿名性はもちろん大事です。しかし、自分自身に対してまで、匿名になっていないか最近少し省みることにしています。

「心にうつりゆくよしなしごとを……」

20生　山谷　義貴

今回、1年生の「研究室紹介」の取材に同行して、とある先生に「座右の銘」を伺った際、「あなたはどうなん?」と逆に聞かれた。「座右の銘」というほど高尚なものではないが、「好きな言葉」でよければ、いくつかある。たとえば、「小さなことからこつこつと」。西川きよしさんの言葉だ。僕は中学時代、地元の図書館に「やすし・きよし」の漫才のCDが置いてあるのを知り、何気なく借りて帰ったことがある。そしてすぐに夢中になってしまい、図書館に置いてある他の漫才や落語のCDもたくさん借りた。しかしやはり、僕の中で「やすし・きよし」に勝る漫才コンビはいなかった。今でも吉本のお笑いは好きで、「よしもと新喜劇」はテレビで毎週見ている。大阪の「なんばグランド花月」で見たことも何度かある。ただ、飛翔の編集室に「おじゃましますか?」と言って入っても、それを理解して「いや、聞かれても……。」とか「聞くな!」とつっこんでくれる人が少ないことは、大変残念なことである(笑)。

「好きな言葉」の話に戻ろう。「あなたとは違うんです」もまた、好きな言葉だ。昨年9月1日月曜日の夜、「1分間の深イイ話」を見ていたら、「福田首相が辞意表明」とニュース速報が流れた。すぐにチャンネルをNHKに変え、中継が始まった会見の最後、低姿勢で穏和な福田氏が放った一言が「私は自分自身を客観的に見ることができるんです。あなたとは違うんです。」であった。(しかもこの発言を引き出したのは、中国新聞の記者である。)強く印象に残った。なぜか。大きな声で言うのも恥ずかしいが、僕は「自分自身を客観的に見……」、いや、自分自身を、相当ユニークでおもしろい人物だと思っている。常に「他の人とは違うんです」と思いながら生きている。ややオーバーだが、誰しも、大なり小なり、そんな思いを持っているものではないだろうか。

「好きなフレーズ」は以上の2つにしておいて、「好きな単語」を挙げるなら、「先輩」だろうか。「先輩」。何と美しい言葉だろう。今年度、1年ぶりに「先輩」と呼ばれる立場になり、「よしピーさん」とか「よしピー先輩」と呼ばれるたびに、嬉しさと照れくささを感じてきた。また、飛翔の1年生からは「山谷さん」「山谷先輩」と呼ばれることもけっこう多く、「山谷」だと「さん」や「先輩」が一層引き立つ気がして、より強く嬉しさや照れくささを感じた。

ところで、僕は小中高と、周りから「山谷君」と呼ばれてきた。いくら親しい友達でも、呼び方は「山谷君」である。実は「よしピー」というニックネームは、友達のそれをまねて小6の頃に考案した。もちろんその時に広めようとしてはみた。ただ……、全く広まらなかった(笑)。その後も、中学校・高校と、周りの人たちが入れ替わるたびに「よしピー」の広め直しをしてはみたが、「山谷君」と呼んでいる、小学校時代からの友達の勢力に押されてか、結局広まることはなかった。そんなことがあったから、大学生になって「よしピー」がいとも簡単に広まってしまったときには、正直、やや驚いた。

以上、「飛翔な日々」を3ページにすれば全体がきれいにおさまるため、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく、長々と書きつくってみた。